

娘結節の大きさに関係なく、被膜を有するものに高い壊死率を認めた。今後さらに、TAEの適応が明確にされるとともに、治療成績を向上させるよう考えている。

10. 肝癌に対する局注療法の検討

本多 弘

わが国の肝細胞癌の80%は肝硬変を合併しているため、肝機能上、手術不能となる症例も多い。このような症例に対し、非癌部肝組織の温存という考えのもとに、我々は、昭和60年2月より、肝癌に対し、無水エタノールの局注療法を行なってきた。

今回、その治療成績およびUS像の変化について、検討したので報告する。

まとめ：肝癌エタノール局注療法は、被膜を有する腫瘍あるいは、2～3回施行した症例に対して有効であった。

しかし、問題点としては、1. 被膜を有しない腫瘍に対する対策、2. 投与薬剤、3. 狙撃の中率、4. 大きい腫瘍に対する問題などで、これらについて、検討するべきと考えている。

11. 肝硬変合併肝癌における食道静脈瘤の進展について

平田 文子

対象・方法：肝癌合併肝硬変で、肝癌発生前後にわたり内視鏡的に食道静脈瘤を観察した38例を対象とした。肝癌の以下の3要素と静脈瘤の進展につき検討した。1. 門脈腫瘍塞栓—門脈一次分枝⊖をA群、⊕をB群とし、さらにB群を片側B1群、両側B2群とした。2. 肝癌占居率を<25%群、25～50%群、50%<群に群別した。3. 肝癌発育様式を被膜⊕、被膜⊖に分けた。

結果：静脈瘤進行経過をみると、肝癌発生前後進行し、程度も強くなった。肝癌3要素でみると、A群に比べB群で、<25%群に比べ50%<群で有意差があった。肝癌発育様式での差はなかった。静脈瘤破裂頻度は42%で、B群、あるいは50%<群で高率だった。腫瘍塞栓出現から破裂まで、平均期間は、3.4Mだった。

結語：肝癌合併食道静脈瘤は、肝硬変時より肝癌発生前後進行し、腫瘍塞栓の広範囲なもの、肝癌占居率が拡大しているものが著明で、破裂も高率であった。

12. 膵腫瘍マーカーの臨床的意義

—CA19-9を中心に—

張 正和

目的：CA19-9の臨床的意義、特に膵癌における臨床的意義について検討した。

対象・方法：CA19-9 RIA Kit (Cento cor) を用い、健常者200例、良性疾患173例、悪性疾患182例を対象に、血清CA19-9について検討した。

結果：①健常者の血清CA19-9は平均値±SDは7.15±6.99U/mlと低値であった。②37U/mlをcut off値とすると膵癌83.3%、胆道癌61.7%の陽性率がみられた。③膵癌の治癒切除例では術前に高値であったCA19-9が術後短期間に正常範囲まで低下し、低値で持続した。非治癒切除例では一時的に低下するも再上昇した。④良性疾患の陽性例は主に膵、胆道系疾患にみられる(10～20%)が100U/ml以上の例は稀であった。

結語：CA19-9は膵癌の診断及び術後癌再発のモニターとして有用と考えられる。

13. シスプラチンが有効であった食道扁平上皮癌の2例

(社会保険山梨病院内科)

茂木茂登子・田中 俊夫・広瀬 寿文・
中沢 肇・小沢みせ子・田辺 誠・
川村 雅枝・前田 淳・井口 孝伯・
飯田 龍一

(同病理) 小俣 好作

高齢、合併症、肝転移等のため化学療法としてシスプラチン投与を選択し、有効であった食道扁平上皮癌2症例を経験した。

第1例にはシスプラチン計135mg、第2例にはシスプラチン210mg、ペブレオマイシン60mgを投与した。第1例は狭窄の改善と周堤の平坦化が、また第2例には著明な腫瘍の縮小が認められた。2症例とも症状発現より約7カ月で悪液質となって死亡し、延命効果は得られず、また肝転移に対しての効果はほとんどなかったが、比較的少ない用量で副作用もほとんどなく、食物の経口摂取については著明な改善が得られた。

14. 十二指腸原発と思われる Adenoacanthoma の1例

(中山記念胃腸科病院)

安康 晴博・矢川 彰治・上田 哲哉・
金子 篤子・林 恒男

症例：77歳男性。昭和60年7月4日、上腹部痛、貧血を主訴として入院した。入院時結膜に貧血を認めたが黄疸は認められなかった。腹部所見では右上腹部に手拳大の硬い腫瘍を触知し、腫瘍マーカーはCA19-9が140U/mlと高値を示した。腹部超音波検査、注腸造影、上部消化管X線検査、腹部CT検査、上部消化管